

# 活動報告書

報告者氏名： 井上賞子

所属： 安来市立赤江小学校

記録日： 26年 2月9日

## 【対象児（群）の情報】

○学年 2年生

○障害名 ダウン症

○障害と困難の内容

- ・知的な遅れがある。
- ・理解している言葉は多いが、発語が少ない。復唱も語尾のみになりがちである。
- ・入学当初は、拒否的な態度や否定的な言葉を口にする事が多かった。

## 【活動目的】

○当初のねらい つながりを感じる中で、「伝えたい」という思いを支える。

「話す」「書く」といった表現の方法を広げて行く。

できることが増える事で、自信を持って周囲の人と関わられるようになる。

○実施期間 1年から2年の2月まで

○実施者 井上賞子

○実施者と対象児の関係 隣接学級の担任で、週2時間の個別指導を担当

## 【活動内容と対象児の変化】

### ○対象児の事前の状況

- ・理解している言葉は多いが、自分の思いを伝える手段はあまり持っていない。
- ・困っていても訴える事はせず、すねて反応しなくなったり、「バカ」「ハナヒゲバーさん」「ちぇっ」と言うことで不満を示していた。
- ・周囲の動きを見て動いているが、やりたい事を主張したり伝えてくる事はない。
- ・マッチングはとても得意で、集中が継続する。
- ・文字のマッチングはできるが、音とは結びついていない。
- ・間違える事にとっても抵抗が強い。
- ・ゲームが好きで、家ではDSを使って遊んでいる。

### ○活動の具体的内容

①「読める」を支えて、文字の読みの力をつける

→「FirstWordJapanese」・「これなあに」・「ひらがな50音」を活用

②「書ける」を支えて、文字の書きの力をつける→「こどもレター」・「にほんご ひらがな」を活用

③「伝わる」を支えて、発話意欲につなげる→「DropTolkHD」・「PhotoMemes」を活用

### ○対象児の事後の変化

#### ①を通じて

- ・FirstWordJapaneseでは、マッチングで熟語を完成させる事ができるため、まだ文字が読めない段階から楽しく取り組み最後までやり切る姿が見られた。また、熟語の音と文字カード1枚ずつの音を何度も確認することができたことで、文字と音を一致させて行く事ができた。

- ・「これなあに」では、問題の画像の示す音や文字がわからなくても「れんしゅう」というボタンを押すと確かめることができるため、とても意欲的に取り組んだ。切り替えることをすぐに覚えて、確認しながら最後までやり切る姿が見られた。ゴールまで行くと「できた!」と胸を張って見せてくれるようになった。



・「ひらがな 50 音」では、音を聞いて 3 枚のカードから正解を選ぶ学習を行った。カードを見て音をこたえるよりも取り組みやすい様子だったが、当初は覚えていないカードが出てくると固まってしまって答えられなかった。「これなあに」と「FirstWordJapanese」でわかる文字が増えてからは、ものすごい勢いで答えていく姿が見られた。

・「音の支援」と「マッチングで確認できる」ということから、間違ふことをとても嫌う本児も納得して取り組めた。

・確認の方法をすぐに覚えて、正確にやりきることができた。

・最後までやり終えて「できた!!」と自慢げに伝えてくるようになった。

・音を常に確認しながらマッチングさせていた事で、文字の読みの定着につながった。

・次第に音のヒントが出る前に「しお」と言ったり「め」と言ったり、文字を見て読みをこたえるようになって行った。

・マッチングが得意な姿から、アナログでもマッチングの教材に取り組んだ。

⇒アイスのスプーンで作ったマッチング教材



☆単音を発音してからパーツを渡していく



☆数が多くても、集中して取り組めた

・当初から「ぬ・め」「は・ほ」「る・ろ」などの似た形も正確に区別できており、音との一致が進んでいくと、必要な文字を一覧から探し出すことも上手になっていった。

・1 年の終わりには、5 音までの清音の単語であれば拾い読みしてカードを正確に選ぶことができるようになった。

・文章になると、一音ずつは読めるが「何が書いてあったか」はなかなか把握できない様子だった。

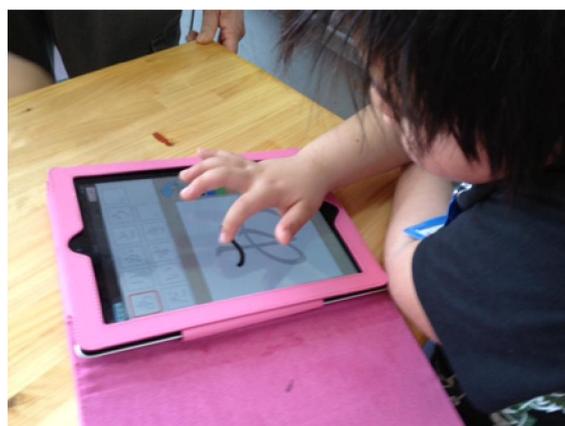
・2 年生以降の「読み」は、「書き」の学習の中でさらに伸びていった。(この点については、次項で触れたい)

## ②を通じて

・「こどもレター」では、大きな表示をなぞっていただけでお手紙が出来上がることから、まだ文字が書けない時期の本児も楽しんでお手紙を作ることができた。

・母の日の手紙を、内容を相談して丁寧に書いて送ったところとても喜ばれ、「もっと書きたい」という意欲を強く持った様子だった。

・当時はまだ鉛筆を持って線を書くことには慣れていなか



ったが、指先で大きくなぞっていけるので、自信を持って取り組む様子が見られた。

- ・なぞる時は大きい画面に一字ずつが表示されるが、出来上がりの画面になると下敷きにしたなぞりの線は消え、7文字が一列に配置される表示になるため、子どもの書いた線だけで「伝わる」お手紙を作ることができた。
- ・右はかなり初期に書いたものだが、下敷きにしたお手本が明朝体だったと分かるほど、細部まで丁寧になぞることができている。

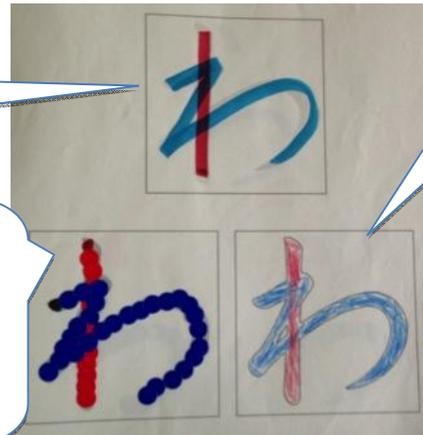
おかあさん、あ  
りがとう。  
だいすき。



- ・上記の姿から本児の「細かい作業に丁寧に取り組める」という良さを強く感じ、その後の定着に向けた学習へつなげていった。

お手本を色分  
けして提示

お手本を見ながらシ  
ールをはっていく。  
触って線の動きを確  
かめる。



白く中をぬいた文字  
を、クーピーで色分  
けて塗っていく

- ・シールや色分けをして線の構成や動きを確認してから、なぞり書きを中心にした練習へつなげていった。



☆「伝わる」「書きたい」という思いを最初に持てたことで、その後の「書き」の学習にはとても意欲的に取り組むことができた。

## 2年の始めの「書き」の状況

☆単音はすべて書くことができるようになっていた。

☆「明日の予定」を予定ボードを見ながら自分で書いたり、支援員さんに書きたいことを伝えておいて1音ずつ言ってもらくと、50音表を見ながらその音の文字を自分で探して書くことができるようになっていた。

★一方で、日常的な単語でも、1人で書くことは難しかった。いったん声にだして確認することができても、「じゃあ書いてみよう」というと書けない状態が続いていた。

Ex)・「みかん」と書こうとする。

- ・「み」「か」「ん」と一音ずつ言ってあげれば50音表がなくても思い出して書ける。
- ・みかんの絵を見て「みかん」ということもできるが、書こうとすると「み」の次が出てこない。
- ・「み・か・ん」だよと声をかけると「みかん」と言うが、「み」の続きが書けない。

・「にほんご ひらがな」では、単語を聞いて単音に分解して選択していく課題に取り組んだ。

・全ての単音は読める状態であったが、語頭音の次に語尾音を選ぶことが多く、単語を音に分解できていない状況がうかがわれた。

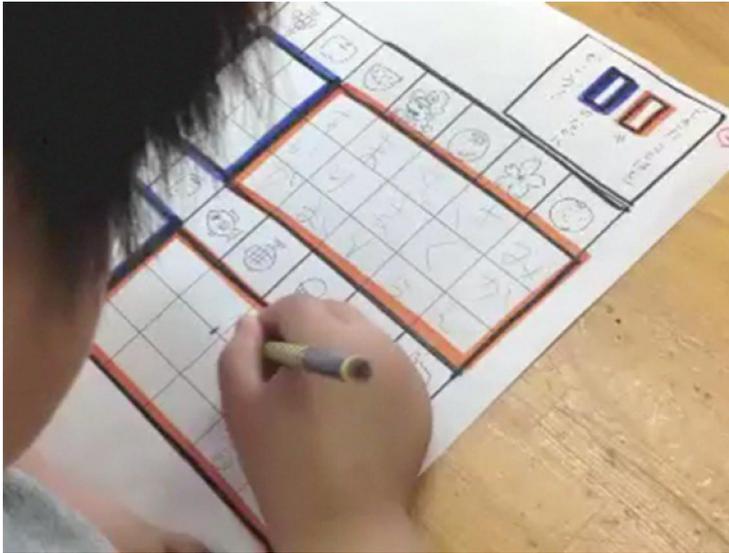




・上記の状況を踏まえて、知っている単語を単音に分けて確認し、文字を選択していく課題に取り組んだ。

Ex.) ・さくらの絵カードを見て「さくら」と声に出す。

- ・「さ・く・ら」と音を分けながら手拍子を打っていく。
- ・文字チップから「さ」「く」「ら」を探して絵カードの下に並べていく。
- ・並べたカードを見ながら「さくら」と読んで確認する。
- ・文字チップを並べられるようになってきたら、同じ課題の「書き」プリントに取り組む。



・3音→4音→5音と単語の文字数を増やしていき、想起した単語を自分に音に分解して書くという学習を重ねていった。また「にほんご ひらがな」の単音への分解の課題にも継続して取り組んだ。

・文章を書く際も、それまでの単音を確認させていくような声かけや支援から、語の塊を聞かせて自分で音に割って書いていくことを意識づけていった。

・2年生の2月現在、日常的な振り返りの文章は、1人で書くことができるようになっている。

・「を」「は」「へ」「っ」なども、よく使う表現の中では、適切に使うことができる。長音・拗音・拗長音については、学習中。

2月 7日 曜日		明日の予定
朝		宿題
1	あさかっとう	あんどく
2	こくご	ぶいんと
3	せいたん	持ってくる物・連絡
4	たにい	
5	こくご	
6		
きょうは	せいたん	
でく	れい	またべ
した。	あいか	た
ご	い	



・「くれーぷ」を「くれぷ」と書いて指導を受けた以外は、自分で内容を考えて文字を想起して1人で書いた→

・「にほんご ひらがな」の音への分解の課題も、5音のものでもスムーズに答えることができるようになっていく。

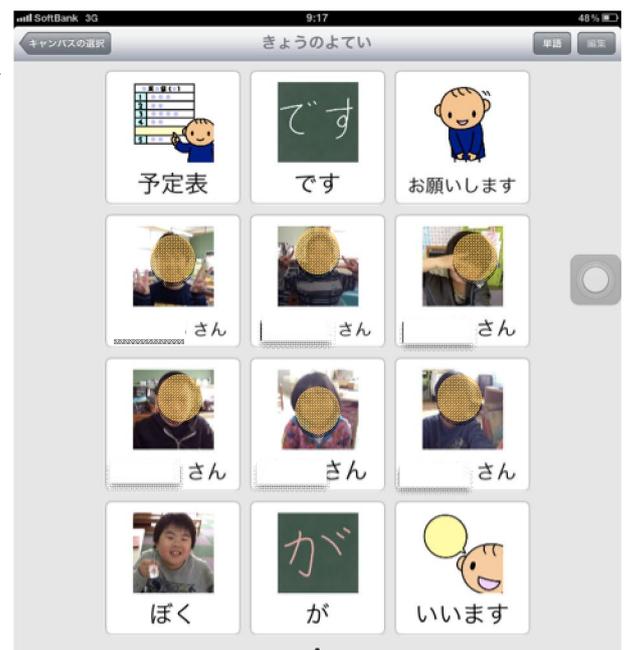
☆言葉の塊を音に分解できるようになっていったことで、逆の文字を言葉の塊に合成していくこともできるようになっていき、「読み」の方もスムーズになってきている。

☆「言葉を知っている・発音できる」と「一文字ずつの音と形がわかる」が1年生のころは別々に伸びてきていた印象があるが、音の合成や分解の学習を意図していったことで、それらが関連していったと感じている。

☆2年生の2月現在、お手紙を書いて気持ちを伝えたり、もらった返事を読んだりする活動は、本児の最も楽しみにしている学習の一つになってきている。

### ③を通じて

- ・「DropTalkHD」では、朝の会の司会を行った。
- ・それまでは支援員さんに項目を言ってもらい、それを復唱する形でやっていたが、語尾だけをなぞったり、何も言わないことも多かった。
- ・友達を当てる場面でも、名前を知っているのにスムーズに出てこないため、支援員さんに「〇〇さん」と言ってもらってから少し声を出すくらいだった。
- ・右のように司会の定型句を入れたボードを用意して順番に選択して読み上げさせ、それを聞いて復唱する方法で、取り組んだ。
- ・操作はすぐに覚えた。次の項目に移る前に前の項目を消すことも、スムーズだった。
- ・最初は「全部聞いてから」話そうとしていたが、次第に「読み上げにかぶせるように」話すようになっていった。
- ・友達を当てる場面では、当初は右下のようにボードから選択して読み上げさせて復唱していたが、次第にあてたい相手の顔を見て「〇〇さんお願いします」と言えるようになり、ボードの読み上げは使わなくなった。
- ・1人で司会の仕事をこなせるようになって、自信をもって取り組む姿が見られた。本児が司会の当番になっている、木曜日を楽しみにするようになっていった。



・なかなか出なかった語尾の「です」や言葉をつなぐ助詞についても、選択・読み上げ・復唱を繰り返す中で意識することができるようになって来ている。

・「PhotoMemes」では、「〇さん学校」「〇さんおうち」の2つのフォトカレンダーを作り、それぞれに学校や家庭での姿を写真で記録して行った。



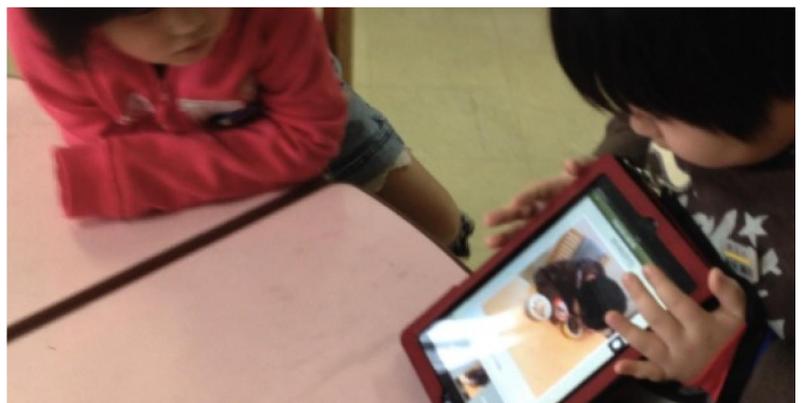
・以前は思いはあってもうまく伝えられないため、家庭で「学校であったこと」を聞いた際も、学校で「家庭であったこと」を聞いた際も、首を傾げたり視線をそらしたりしてあまり反応しなかった。

・フォトカレンダーを使って、「伝えたいこと」を写真を共有することで、正しく「伝わる」ということは、モチベーションを大きく高めたようで、自分から写真を開いてみせようとしたり、写真を指差しながら話そうとすることが増えて来た。

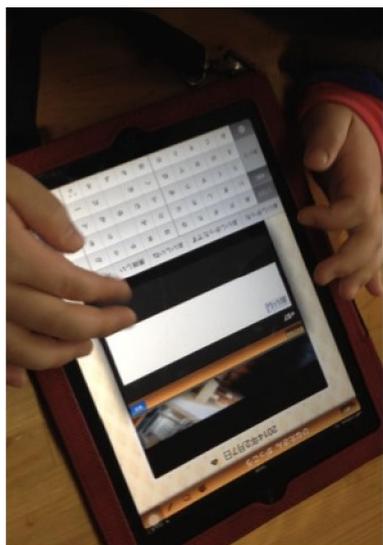
・朝の会の「スピーチ」の時は、アプリを起動して紹介したい写真を選んで開き、友達に見せながら話したり、質問に答えたりするようになった。

ex.) 「なっとうごはんを食べたよ」と伝えている場面。

- ・「なっとうごはんをたべたよ」と話す。
- ・「質問はありませんか」と言うと「誰と食べましたか」と聞かれる。
- ・指を3本立てて「3人」と言う。
- ・「3人ってだれ?」と聞かれる。
- ・「ぼくと〇ちゃん(弟)とママと3人」と答える。
- ・他の質問にもにこにここと答えて行った。



・最初の頃は、写真だけだったり、写真へのメモは大人が書き入れたりしていたが、50音キーボードを使いながら自分で入力していくことができるようになっていった。



↑50音キーボードで入力



↑「おいしかったです」



↑写真にコメントがつく

・促音や句読点まで、入力が早くて正確なので、家庭でも学校でも「すごいねー」とほめられることが多く、意欲的に取り組んで「はい」と胸をはって見せてくれるようになっていった。

#### 【報告者の気づきとエビデンス】

#### ○主観的気づき

☆可能な手だてで「伝わる」が支えられて行ったことで、「伝えたい」意欲が継続したのではないか

- ・スタートは「読めない」「書けない」「話せない」状態だった。
- ・「50音を覚えてから読む」「50音を覚えてから書く」ではなく、読めない子が「読める」手だてを、書けない子が「書ける」手だてを持つことで、「読むって楽しい」「もっと読みたい」「書くっておもしろい」「もっと書きたい」という意欲が支えられ、繰り返しの練習や苦手だった音の分解の課題にも向かって行けたのではないかと考える。
- ・話し言葉についても、「本児の話し言葉が増える」が先ではなく、「話したいことが伝わる」を先に持って来たことで「伝えたい内容が相手に共有されている」という安心感をもちながら話すことができるようになった。結果として機会が保証され、言葉が増えて行ったのではないかと考える。

☆「できる」がまだ充分でなくても「伝わる」をスタートにすることができるのが、こうしたICT機器を活用する時の魅力の1つだと感じている。

☆「伝わる」→「伝えたい」→「伝わる」の繰り返しの中で、日常の発語が増えて行ったのではないか

- ・当初は「おはよう」と言われても返事をせず「おはようは？」と聞くと「よう!!」と吐き捨てるように叫ぶ感じだったのが、今では声がけに「うん、わかった」と返して来たり、「できたよ」「OOくんどこ?」「これやるの?」と自分から問いかけて来たりするようになって来ている。
- ・家庭でも「やり取りの言葉が増えて来た」という実感を持っていただけており、祖父母からも「電話でのお話が上手になった」と言われている。電話では、表情や身振りで言いたいことを補えないことから、話し言葉が増えていることを示すエピソードの1つだと考える。
- ・「伝わる」状態が支えられた日常のやり取りの中で、本児の発語は確実に増えて来ている。
- ・同時に、入学当初に顕著だった「ハナヒゲバーさん」というような言葉は、全く使わなくなって来た。

当時は伝えたいことがうまく伝えられず、本児もいらだっていたのかもしれない。伝える手段が増えて来た今は、「自分の伝えたいことを伝えるように」表現できるため、必要なくなって自然に言わなくなったのではないかと感じている。

☆多様な「伝える」手だてを持てたことで、相互に正確性や流暢性をあげることができたのではないか

- ・「たのしかったです」「おもしろかったです」「おいしかったです」「またやりたいです」「またたべたいです」といった言葉は、予定を書いたり、スピーチをしたり、フォトカレンダーの記録に添えたりと、多様な場面で良く使った。こうした言葉については、特に定着が早く進んでいった。「つ」を選んで「小」のボタンを押して「っ」として表記し、あとから読み返して確認して行くといったプロセスが、想起して書く場面でも促音を正しく書けることにも影響したと感じている。場面や機会の保証が、定着へつながって行ったと考える。
- ・また、「書き」の学習の中での音の分解や合成のプロセスが、「読み」の流暢性にもつながって行った。
- ・その「書き」の場面では、一度音に出してみる「話す」というプロセスが重要だった。

☆もともと理解言語は多いと考えられていた児童であり、伝えたいことが表出の手段とつながって行ったことで、周囲との関わりも増えてきている。

【今後の見通し】

機器を使うことに対しては意欲的で、自分がうまく言えない部分を補ってくれるものだという見通しももっている。しかし今は、不器用さの問題もあり、「iPad を支えて撮りたいものを自分でとる」ということはできていない。大人に向かって「撮って」と要求することはあるが、多くは大人がとった写真の中から選んで行くという手順をふんでいる。そうすると「誰かが撮ったもの」の中しか選択肢がもてないことにもなる。

「思い」と「表出」をより強く結んで行くためにも、「記録しておきたい場面を自分で選び、自分で撮影することができるようしていきたい」。それには、「日常の中に撮影する場面を多様にもうけて行く」「本児にとっての撮影しやすさを支えるアプリを探して行く」「操作を支えるホルター等の検討をしていく」が必要になると思われる。

フォトカレンダーの活動の中で、50音キーボードの活用が進んで来た。手書きするよりもかなり早いスピードで入力することができている。出力したものも読みやすいため、読み返して確認することも容易にできる。そこで、この方法を本児の日常的な手だての1つにして行くことを模索したい。現在はフォトカレンダーへの入力場面でのみ使っているが、場面を広げて行くことで、より流暢性をあげていきたい。予測変換の便利さについても、体験する中で身につけて行けると、より将来につながる手だてとしての活用が期待できると考える。

